

# 那珂 63

— 那珂遺跡群第 130 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1158 集

2 0 1 2

福岡市教育委員会











NA KA  
那珂 63

—那珂遺跡群第130次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1158集



遺跡略号 調査番号  
NAK-130 1015

2012

福岡市教育委員会



## 序

玄界灘に面して広がる福岡市は、古くから大陸との玄関口として発展し、市内には多くの歴史遺産が存在します。これらは私たちの暮らしに潤いを与え、豊かな生活環境を作り出しています。福岡市教育委員会はこれらの遺跡を後世に伝えていくため、様々な形で遺跡の保存・活用に取り組んでいます。

その一方で、開発事業により、重要な遺跡が破壊され、失われつつあるという厳しい現実があります。本市教育委員会ではこれらの遺跡については事前に発掘調査を行い、先人の足跡を後世に残せるよう、その記録保存に努めています。

本書は博多区那珂2丁目における那珂遺跡群第130次調査の成果を報告するものです。那珂遺跡群は北西に位置する比恵遺跡群とともに、弥生時代以降の重要な遺構・遺物が数多く発見されており、この地が中国の史書にみえる「奴国」の対外交渉拠点であったことを雄弁に物語っています。今回の調査でも、弥生時代から近世にいたる集落の一部を調査することができました。この調査の成果は、地域の貴重な資料になるものと考えます。

本書が文化財保護へのご理解とご協力を得られる一助となるとともに、学術研究の資料としてご活用頂けましたら幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、事業者をはじめとする多くの方々のご理解とご協力を賜りました。ここに心より謝意を表します。

平成24(2012)年3月16日

福岡市教育委員会  
教育長 酒井龍彦

## 例言・凡例

1. 本書は、集合住宅建設事業に伴い福岡市教育委員会が平成22年度に実施した那珂遺跡群第130次調査（福岡市博多区那珂2丁目）の発掘調査報告書である。発掘調査および整理報告書作成は、民間受託・国庫補助事業として実施した。

2. 本書作成における作業分担は以下の通りである。

遺構実測	板倉有太・朝岡俊也
遺構写真撮影	板倉
遺物実測	朝岡・板倉
拓本	朝岡
トレース	副田則子・朝岡・板倉
遺物写真撮影	板倉
土器・土壌元素分析	九州大学大学院比較社会文化研究院
ガラス管玉材質分析	福岡市埋蔵文化財センター
執筆	第V章第1節：石田智子、第2節：西澤千絵里、その他：板倉
編集	板倉

調査・整理の過程で諸氏のご協力を頂いた。ご芳名を掲げて謝意を表したい（五十音順・敬称略）。  
加藤良彦 久住猛雄 蔵富士寛 比嘉えりか 宮井善朗 森本幹彦 屋山 洋

3. 本書に使用した方位は磁北で、磁気偏角は西偏6°59'である。国土座標は世界測地系を用いた。

4. 遺構略号はSB（掘立柱建物）、SC（堅穴建物）、SD（溝）、SE（井戸）、SK（土坑）、SP（ピット）、SX（包含層等その他）とする。

5. 報告後の遺物・写真・図面の管理は、福岡市埋蔵文化財センターで行う予定である。

6. その他調査に関わる基本情報は下表の通りである。

遺跡名	那珂遺跡群	調査回数	130次	遺跡略号	NAK-130
調査番号	1015	分布地図図幅名	板付24	遺跡登録番号	020085
申請地面積	847.41㎡	調査対象面積	160㎡	調査面積	168㎡
調査期間	平成22年6月30日～平成22年8月10日			事前審査番号	22-2-20
調査地	福岡市博多区那珂2丁目5-12				

# 本文目次

第I章	発掘調査の経緯	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第II章	遺跡の位置と環境	2
第III章	調査の方法	
第1節	調査の方法	4
第2節	調査の経過	4
第IV章	調査の成果	
第1節	調査の概要	5
第2節	遺構と遺物	5
第V章	自然科学分析	
第1節	弥生土器および粘土の胎土分析	26
第2節	ガラス管玉について	27
第VI章	総括	28

# 挿図・表・写真目次

第1図	調査区周辺の既調査区(1/5,000)	3
第2図	調査範囲と区割り(1/500)	3
第3図	遺構全体図(1/100)	6
第4図	調査区北壁西側土層実測図(1/40)	6
第5図	SB224実測図(1/50)	7
第6図	SB224出土遺物実測図(1/1、1/3)	7
第7図	SC045実測図(1/50)	10
第8図	SC045掘方実測図(1/50)	11
第9図	SC045出土須恵器実測図(1/3)	11
第10図	SC045出土遺物実測図(1/3、1/2)	12
第11図	SC180実測図(1/50)	14
第12図	SC180出土須恵器実測図(1/3)	14
第13図	SC180出土遺物実測図(1/3、1/4)	15
第14図	SK実測図(1/40)	16
第15図	SK014・143出土遺物実測図(1/3、1/1)	17
第16図	SE019、SK実測図(1/30)	18
第17図	SE019・SK214・SK141出土遺物実測図(1/3)	19
第18図	SD実測図(1/50)	20

第19図	SD出土土器実測図(1/3) .....	21
第20図	SP出土土器実測図(1/3) .....	21
第21図	SX088、攪乱出土土器実測図(1/3) .....	22
第1表	出土遺物観察表 .....	23
第22図	弥生土器および粘土の希土類元素存在度(REE)パターン .....	26
写真1	ガラス管玉の実体顕微鏡写真 .....	27

## 図版目次

図版 1	1. 1区全景(南から)	2. 2区全景(南から)
図版 2	3. 1区北壁西側土層	4. 1区北壁東側土層
	5. SB224(南から)	
図版 3	6. SD011(北西から)	7. SD084(北西から)
	8. SD011土層(北東から)	9. SD084土層(北西から)
図版 4	10. SC045貼床検出(南から)	11. SC045(南から)
図版 5	12. SC045カマド土層(北西から)	13. SC045カマド土層(西から)
	14. SC045北ベルト東面土層	15. SC045南ベルト東面土層
	16. SP066(西から)	17. SP079(西から)
図版 6	18. SC180(南から)	19. SC180東ベルト南面土層
	20. SC180北ベルト東面土層	
図版 7	21. SC180 廳(12図36)出土(北から)	22. SC180 妻(13図41)出土(北から)
	23. SK014(南から)	24. SK014 壺(15図55)、高坏(56)出土(西から)
	25. SK009(南から)	26. SK009土層(南から)
図版 8	27. SK201(南から)	28. SE019 土器(17図61-63)出土(北から)
	29. SE019土層(北から)	30. SE019(北から)
	31. SE019断ち割り(北から)	32. SK018土層(南西から)
図版 9	33. SK214(東から)	34. SD012(南から)
	35. SD211(南から)	36. SD144(南西から)
図版10	37. SB224出土遺物	38. SC045出土遺物
図版11	39. SC180出土遺物	
図版12	40. SK014出土遺物	41. SE019出土遺物
	42. SK214出土壺	
図版13	43. SK・SD出土土遺物	44. SD207出土椀
	45. SP166出土鉄滓	46. SP出土遺物

# 第 I 章 発掘調査の経緯

## 第 1 節 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、埋蔵文化財の保護を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

2010年4月9日、個人事業者から、福岡市博多区那珂2丁目87・88番(847.41㎡)内において計画した集合住宅建設事業地内の埋蔵文化財の有無について、福岡市教育委員会に照会があった(受付番号22-2-20)。教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課では、申請地が那珂遺跡群内にあることから、2010年4月19日に予定地において確認調査を実施し、埋蔵文化財の存在を確認した。教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課および同第2課では、試掘と周辺調査の成果をふまえた上で、事業範囲については発掘調査が必要であると判断し、その旨を事業者宛に報告・通知した(事前審査報告書(教理1第2-20号)、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)(教理1第191号))。

事前審査の結果をもとに埋蔵文化財第1課と事業者が協議を行い、遺跡の現状保存が困難であるため、破壊部分について発掘調査を実施し、記録保存とすることとなった。発掘調査業務については、事業者の委託を受けて、福岡市教育委員会が行うことになった。

各担当者による現地協議を経て、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課が2010年6月30日から2010年8月10日まで発掘調査を行った。また、整理作業と報告書の作成は、調査担当者が2011年度(平成23年度)に行った。

調査・整理の過程では、事業者をはじめとした関係各位のご理解とご協力を頂いた。記して感謝申し上げます。

## 第 2 節 調査の組織

発掘の調査・整理にあたっての組織は以下の通りである。

調査委託 個人

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財第2課 課長 田中壽夫 調査第2係長 菅波正人

調査庶務 文化財部埋蔵文化財第1課管理係 古賀とも子

事前審査 文化財部埋蔵文化財第1課事前審査係 木下博文

調査担当 文化財部埋蔵文化財第2課調査第2係 板倉有大

調査作業 朝岡俊也・梅木千恵・大庭智子・小野山次吉・小路丸嘉人・近藤末孝・坂口壽美子・静啓子・遠山勲・戸山龍男・林厚子・北条こず江・山下直美・山田美恵子・安高邦晴・結城フザコ・脇田誠二(五十音順)

整理作業 副田剛子・藤野静子、朝岡俊也(福岡大学人文学部学生)

整理協力 石田智子(九州大学大学院比較社会文化研究院)

西澤千絵里(福岡市埋蔵文化財センター) (五十音順)

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

本調査地点は、福岡平野の北側を北西に延びる洪積台地の東側緩斜面、標高約9mに位置する。調査地点が位置する台地は、阿蘇火山起源のASO-4火砕流(八女粘土)を基盤として、西の那珂川、東の御笠川に開析される。調査地点は、福岡市内遺跡分布地図上で那珂遺跡群の南半東側に位置し、130次の調査となる。那珂遺跡群では2012年3月現在までに135次の調査が行われている。那珂遺跡群周辺の地勢、主要遺跡についての詳細は既刊報告書に譲り、以下には、130次調査周辺の既調査区(第1図)を中心に旧石器時代から中世にいたる歴史的環境を整理する。

**旧石器時代・縄文時代** 西側の台地中央部に位置する41次・110次調査では、遺構検出面である鳥栖ローム層上部の赤褐色ローム(レス層)中から、ナイフ形石器など旧石器時代の石器がブロックとして確認されている。その他の調査地点でも、旧石器時代～縄文時代の遺物の出土が断片的ながらも確認されており、該期の居住のあり方について、今後の調査成果が待たれる。

**弥生時代** 西側の台地縁辺に位置する37次調査では、弥生時代早期・突帯土土器期の二重環濠集落が確認されている。弥生時代中期以降には、区画溝、大型掘立柱建物、墳丘墓などの特殊遺構の検出が目立ち、北西の比恵遺跡群と一体化して奴国の拠点集落の様相を呈すようになる。北側の台地縁辺に位置する113次調査では、谷SX41から弥生時代中期後半の丹塗土器がまとまって出土している。南の79次調査では、井戸SE05から双孔広口壺・袋状口縁壺を主体として30個体以上の土器が出土した。南側の台地縁辺に位置する38次調査では、中期の甕棺16基が確認されている。西側の台地中央に位置する20次調査では、銅支脚型が出土している。

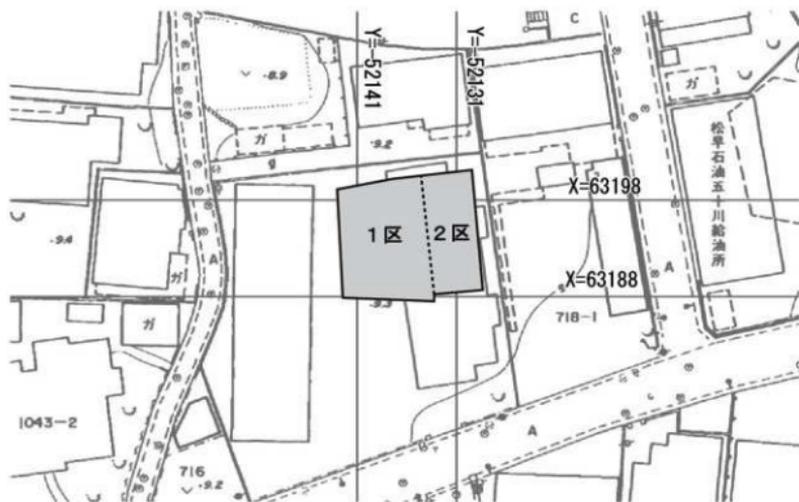
**古墳時代** 那珂遺跡群の中央部に、三角縁神獸鏡が副葬された古墳時代前期の前方後円墳である那珂八幡古墳(全長約85m)が造営される。那珂八幡古墳から南側には幅6～7mの並列溝が延びており、道路側溝と考えられている。それに沿って方形周溝墓群が築造されており、計画的な墳墓造営の可能性が指摘されている。その後、5世紀代の遺構・遺物の確認は低調となるが、6世紀中頃に北側で東光寺塚古墳が造営された後、堅穴建物や掘立柱建物が多く確認されるようになる。この時期に集落の形成が活発化すると考えられている。

**古代** 比恵遺跡群では6世紀後半～7世紀初頭の倉庫群、欄列について、宣化元年(536)に設置された「那津官家」との関係が指摘されている。那珂遺跡群では、8世紀に至るまで多重欄列、大型掘立柱建物、正方位の溝などが確認されており、大宰府の前身とされる筑紫大宰や那珂郡衙との関わりが想定される。南側の120次調査では行基瓦や6弁軒丸瓦などが出土している。

**中世** 西側の27次、北側の113次調査では、中世後半期の溝について、館を囲む方形区画溝の可能性が指摘されている。博多の大内氏支配に伴って那珂村が大内家臣団の知行地になっていたこととの関係が注意されている。



第1図 調査区周辺の既調査区 (S=1/5,000)



第2図 調査範囲と区割り (S=1/500)

## 第三章 調査の方法

### 第1節 調査の方法

今回の調査地点は、福岡市文化財分布地図上で那珂遺跡群の南半東側に位置し、周辺調査成果および埋蔵文化財第1課による試掘結果から、弥生・古墳・古代・中世の集落関係遺構が確認されることが予想された。

調査用ユニットハウス・トイレは調査範囲の南側に設けた。遺構面がGL-70～90cmと比較的深く、場内での排土置場が確保できないため、打って返し（半転）の調査とした。2010年6月30日から西側（1区・下端70m）の調査を開始し、同年7月30日に東側（2区・下端50m）の調査に移った。同年8月10日に機材等を撤収して調査を終了した。すべて表土をバックホーで除去した後、発掘作業員約20名で遺構検出および掘削を行った。要調査範囲すべてを調査し、調査区上端での総調査面積は約168m<sup>2</sup>であった。

調査区内のグリッドは、調査区の範囲に合わせた任意座標とし、福岡市教育委員会が設置した4級基準点T-31およびT-27から日本測地系座標を与えた。本報告では世界測地系座標に変換して表記している。座標測定は調査担当者が光波測距儀を用いて行った。標高値は、4級基準点T-31（標高7.637m）から約50m移動し、機械高を標高10.000mとした。調査写真は、35mm判と6×7cm判のモノクロおよびリバーサル、デジタルカメラ（NiconD70s）で撮影した。全景写真については、高所作業車の上から撮影した。現場での実測・測量図の縮尺については、1/10遺構実測図、1/20遺構平面図、1/20土層実測図、1/100調査区内平板測量図とした。土層注記は新版標準土色帖をもとに担当者の肉眼観察で行った。出土遺物は調査終了後に洗浄・乾燥させた。

自然科学分析については、調査中に九州大学大学院比較社会文化研究院がSK014出土弥生土器片とSE019壁面地山の土壌採取を行い、元素分析を行った（第V章第1節）。また、SB224出土ガラス管玉の分析を福岡市埋蔵文化財センターに依頼した（第V章第2節）。

### 第2節 調査の経過

調査の経過は、次の通りである。

平成22（2010）年

- |          |                   |
|----------|-------------------|
| 調査開始前    | ユニットハウス・トイレ・外柵の設置 |
| 6月30日（水） | 機材類搬入。西側調査開始      |
| 7月30日（金） | 西側調査終了および東側調査開始   |
| 8月10日（火） | 調査終了。機材類搬出。発掘調査終了 |

## 第Ⅳ章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

調査区の西側約1/3は、段造成によって削平され、遺構の遺存状態は悪かった。削平を免れた東側では、既存建物に関わる攪乱土坑（第3図破線部分）の影響を受けつつも、比較的密に遺構を確認した。竪穴建物・溝・方形土坑・円形土坑・柱穴などが切り合った状態で、出土遺物も弥生時代～中世まで時期幅を持ち、複合遺跡の様相を呈している。

層序は、上層から客土→灰黄褐色土→褐色→黒褐色粘質土（包含層）→橙色～にぶい赤褐色粘土（地山・遺構面）となる（第4図）。客土下の灰黄褐色土は、西側の段造成と一連の堆積をなしており、染付等の遺物を含む。このことから段造成は近世以降に行われたと考える。遺構埋土は、黒褐～暗褐色の粘質土で、橙色～黄褐色粘土（地山）がブロック状に混ざる度合いや灰色味、砂質度合いの違いで複数パターンがみられたが、切り合い関係の判断では困難な部分があった。

遺構の概要は、2条の布掘りからなる建物SB224、カマド付きで4本柱穴構造の方形竪穴建物SC045、壁溝をめぐらす方形竪穴建物SC180、楕円形土坑SK014、方形土坑SK009・056・142・201・078・225・208、素掘り井戸SE019、小型円形土坑SK018・077・214・141、溝SD012・207・144・211、柱穴SP約180基などを確認した。SB224は、当初は平行する2条の溝（SD011・084）と認識していたが、形状および類例などから布掘建物と判断した。SK014は貯蔵穴もしくは小型竪穴建物と想定している。SK009・056・142・201・078・225・208は遺存状態の悪い方形竪穴建物の可能性もあるが、構造・出土遺物からは判断できなかった。SK214については、SC180に切られた竪穴建物の付属施設である可能性もある。SD207・211については、最終的にはSC045・180を切っていると結論したが、調査中当初は切り合いの判断が異なっており、一部の遺物の取り上げで混在を招いている。柱穴については、埋土・出土遺物・構造・配置などから掘立柱建物の復元を試みたが、明確な根拠を持って建てられるものがなかった。

遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・木器・石器・鉄滓など、弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世の遺物が、パンコンテナ15箱分出土した。以下の報告において、遺物の詳細については観察表（第1表）を参照されたい。陶磁器の分類・時期の記述については、宮崎亮一編（2000）『大宰府条坊跡XV：陶磁器分類編』（第49集）を参照した。

### 第2節 遺構と遺物

#### 布掘建物

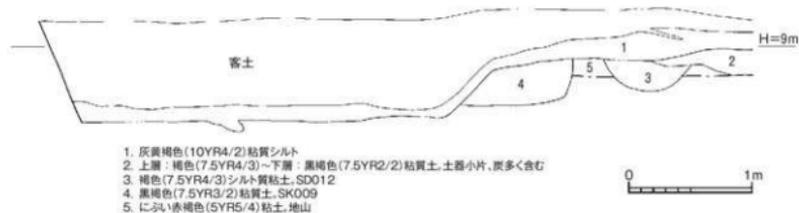
#### SB224（SD011・084）（第5図、図版2・3）

1区で確認した北西軸の布掘建物である。2列溝の範囲は長さ6.1m、幅4.2mである。溝は、幅50cm、深さ40～50cm、断面は逆台形で、中央よりやや北側の一カ所が深くなる。埋土は黒褐色粘質土で砂の堆積は認められない。東側のSD084は、SC045貼床下で検出した。

**出土遺物（第6図、図版10）** 土師器の甕（1）・鉢（2）・高坏（3）・ガラス管玉（4）などが出土した。土器は未図化資料も含めて胎土に角閃石が目立つ。ガラス管玉は青紺色で、コバルト着色のカリガラスを引き伸ばし法で製作したものという分析結果が得られている（本書第V章第2節）。その他、土師器片が少量出土した。遺物から遺構の時期は、古墳時代前期と考える。

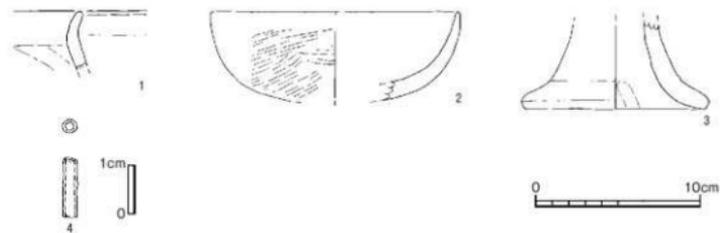
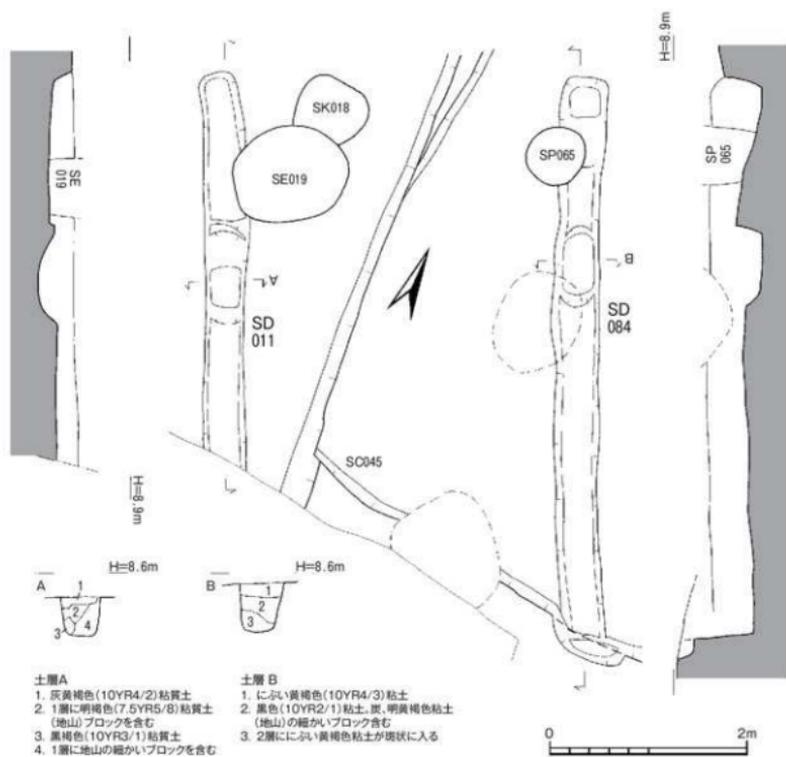


第3図 遺構全体図 (S=1/100)



1. 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト
2. 上層: 黄色(7.5YR4/3)~下層: 黄褐色(7.5YR2/2)粘質土、土器小片、灰多く含む
3. 黄色(7.5YR4/3)シルト質粘土、SD012
4. 黄褐色(7.5YR3/2)粘質土、SK009
5. 黄緑色(5YR5/4)粘土、地山

第4図 調査区北壁西側土層実測図 (S=1/40)



## 竪穴建物

### SC045 (第7・8図、図版4・5)

1・2区で確認した略南北軸の方形竪穴建物である。南北長5.4m、東西長5.3mで貼床までの深さが12～13cm、貼床の厚さが3～5cmである。主柱穴は4個で、径50cm、深さ50～60cmを測り、径10～20cmの柱痕跡が残る。南辺中央に廃絶されたカマドが残る。貼床上に明赤褐色に硬化した燃焼部が形成され、カマド袖とみられる橙色焼土塊片、灰白色シルト・砂、炭、褐色土の混土とともに支脚(17)と接合しない甕胴部片が堆積する。貼床下の掘方は、竪穴壁下を回り、北・南辺中央が一段掘りくぼめられている。貼床は、黄褐色土(地山)の細かいブロックが混ざった暗褐色粘質土、床上埋土は、黒褐色粘質土となるが、深さが12～13cmと浅いため、堆積からみた詳細な埋没過程は不明である。**出土遺物(第9・10図、図版10)** 須恵器の坏蓋(5・7・8)・坏身(9～12)・蓋(6)・甕(13)・高坏(14)、土師器の甕(18)・甌(19～23)・鉢(15)・高坏(16)・支脚(17)などが出土した。5・11は貼床直上から出土した(第7図)。また、白磁皿(24)・須恵器高台付椀(25)・土師器高台坏(26)・須恵器浅鉢(27)・土師質の平瓦片(28)・壺(29)・砂岩裂石庖丁未成品(30)が出土したが、古代・中世の遺物については、SC045埋土中に切り込んでいて検出できなかつた柱穴等からの混入と考える。その他、鉄器小片、黒曜石・玄武岩・頁岩・砂岩・花崗岩などの石材片少量、コンテナケース2箱分ほどの土器片が出土した。遺物から遺構の時期は、6世紀後半と考える。

### SC180 (第11図、図版6・7)

2区で確認した略南北軸の竪穴建物である。残存南北長4.6m、残存東西長3.5mで深さが40～45cmである。壁溝が北・西壁際にみられ、下端幅10cm、床面からの深さ5～10cmを測る。床面は平坦に仕上げられている。主柱穴・地床炉・貼床等は認められなかった。埋土は黒褐色粘質土の単層で、埋没にあまり時間はかかっていると考える。西側でSK214を切り、東側でSD211に切られる。**出土遺物(第12・13図、図版7・11)** 須恵器の坏蓋(31・32)・坏身(33)・甕(34～37)・小型壺(38)・鉢(39)、土師器の甕(40～44)・把手(45)・高坏(46)・移動式竈(47・48)、土師質の平瓦片(49)、シルト質砂岩裂の小型砥石(50)などが出土した。36は床面上10cm、37・41・42は床面直上から出土した(第11図)。その他、黒曜石・玄武岩・砂岩・滑石などの石材片少量、コンテナケース2箱分ほどの土器片が出土した。遺物から遺構の時期は、7世紀後半と考える。

## 楕円形土坑

### SKO14 (第14図、図版7)

1区で確認した北東軸の楕円形土坑である。長さ2.77m、幅2.15m、深さ2～10cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。SKO56とは床面レベルが同じで、明確な切り合いは不明である。**出土遺物(第15図、図版12)** 弥生土器の甕(51～54)・小型広口壺(55)・鉢(56)・器台(57)が出土した。54～56は、床上3～5cmから出土した(第14図)。51～53については胎土分析を行った(本書第V章第1節)。その他、土器片、黒曜石小片が出土した。遺物から遺構の時期は、弥生時代中期中頃～後半と考える。

## 方形土坑

### SKO09 (第14図、図版7)

1区で確認した略南北軸の方形土坑の一部である。残存部分で長さ1.2m、幅0.75m、深さ20cmを

測る。埋土は黒褐色粘質土である。図化に耐えない弥生土器片が少量出土した。

#### SK056 (第14図)

1区で確認した略南北軸の大型方形土坑の一部である。長さ3.45m、残存幅1m、深さ3～10cmを測る。遺存が不良で、SK014との切り合いは不明瞭である。図化に耐えない土師器・須恵器片が少量出土した。出土遺物はSK014より新しい。

#### SK142 (第14図)

2区西端で確認した北西軸の不整形大型土坑である。残存部分で長さ3m、幅1.2m、深さ4～7cmを測る。図化に耐えない土師器・須恵器・玄武岩片が少量出土した。

#### SK143 (第3図)

2区西端で確認した円形土坑で、西側を攪乱に、南側をSK142に切られており、規模・構造等の詳細は不明である。

**出土遺物(第15図)** 黒曜石製の打製石鏃(58)・使用痕剥片石器(59)が出土した。59は二次加工によって三角形に成形し、下辺に使用に伴う片面微細剥離が認められる。刃先角は90°で搔器様の使用が想定される。その他、図化に耐えない土師器・須恵器・黒曜石片・花崗岩片が少量出土した。

#### SK201 (第14図、図版8)

2区で確認した略南北軸の大型方形土坑である。長さ3.17m、残存幅1.25m、深さ5cmを測る。SD211に切られる。少量の図化に耐えない土師器・須恵器・黒曜石片が出土した。

#### SK078 (第7図、図版4)

1区で確認した方形土坑の一部である。南側をSC045に切られており、規模・構造等の詳細は不明である。図化に耐えない土師器・須恵器片が少量出土した。

#### SK225 (第7図、図版4)

1区で確認した方形土坑の一部である。南側をSC045に切られて、規模・構造等の詳細は不明である。図化に耐えない土師器・須恵器片が少量出土した。

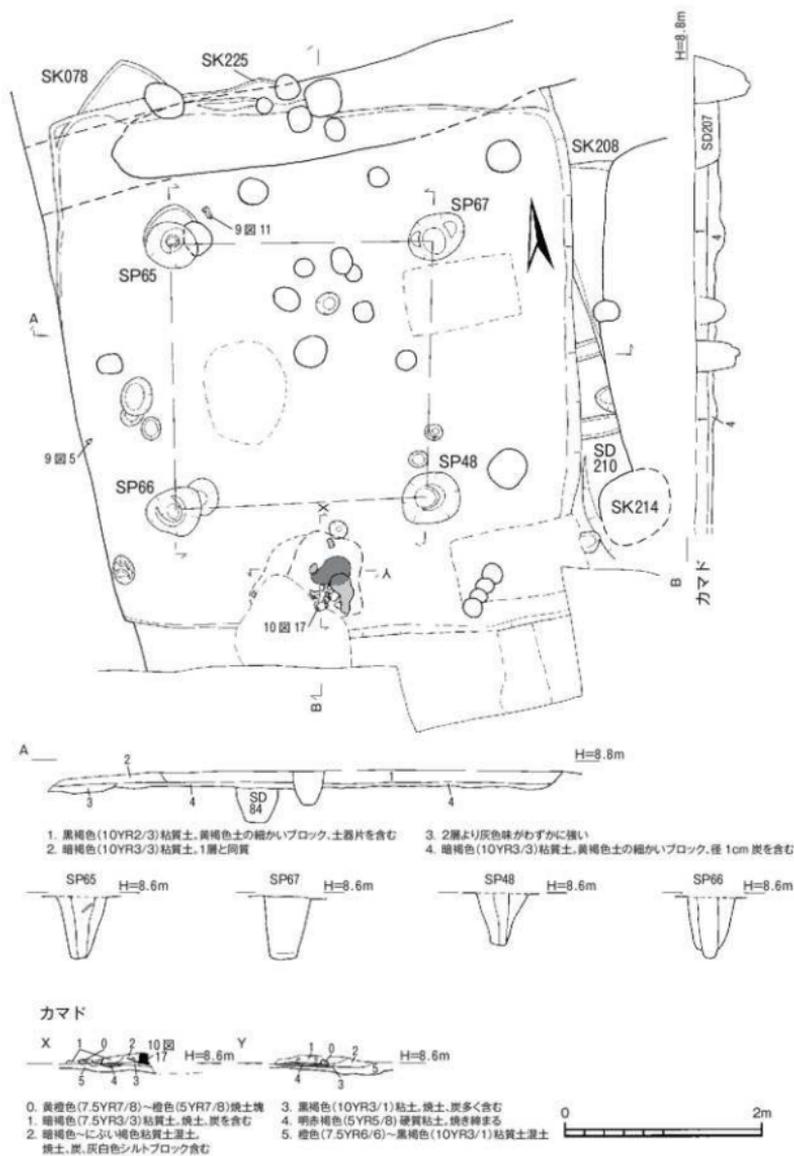
#### SK208 (第7図、図版6)

2区で確認した方形土坑の一部である。西側をSC045に、東側をSC180に切られており、規模・構造等の詳細は不明である。SD210やSK214と一連のもので竪穴建物の可能性もある。図化に耐えない土師器片が少量出土した。

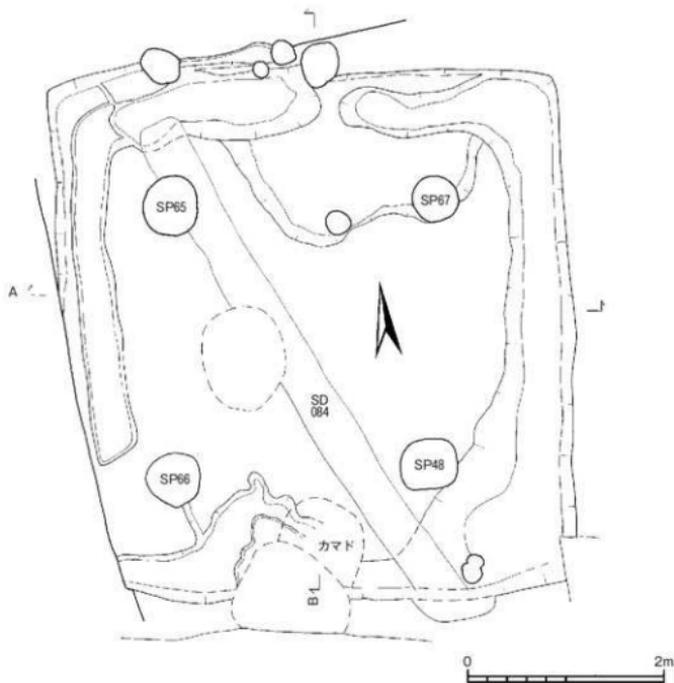
#### 井戸

#### SE019 (第16図、図版8)

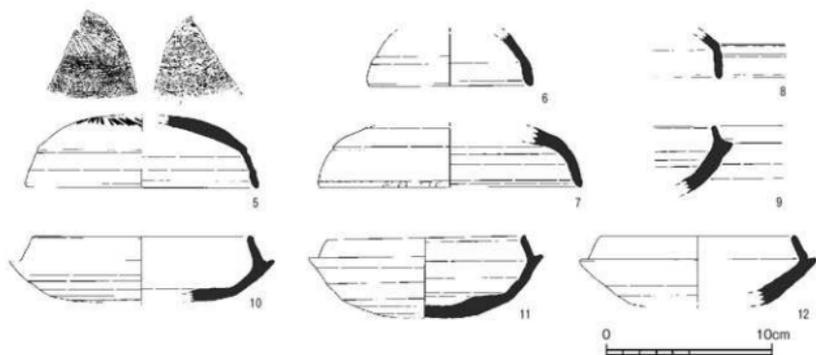
1区で確認した円形の素掘り井戸である。径1m、深さは約3mを測る。埋土は、黒褐色粘土と橙色～黄褐色砂質土(地山)との混土の互層状堆積である。底面から土師器壺(60)と板状木製品(64)、最上層から甕(62)・壺(61)・高坏(63)が出土した。また、底面以下地山の白色粘土について元素分析を



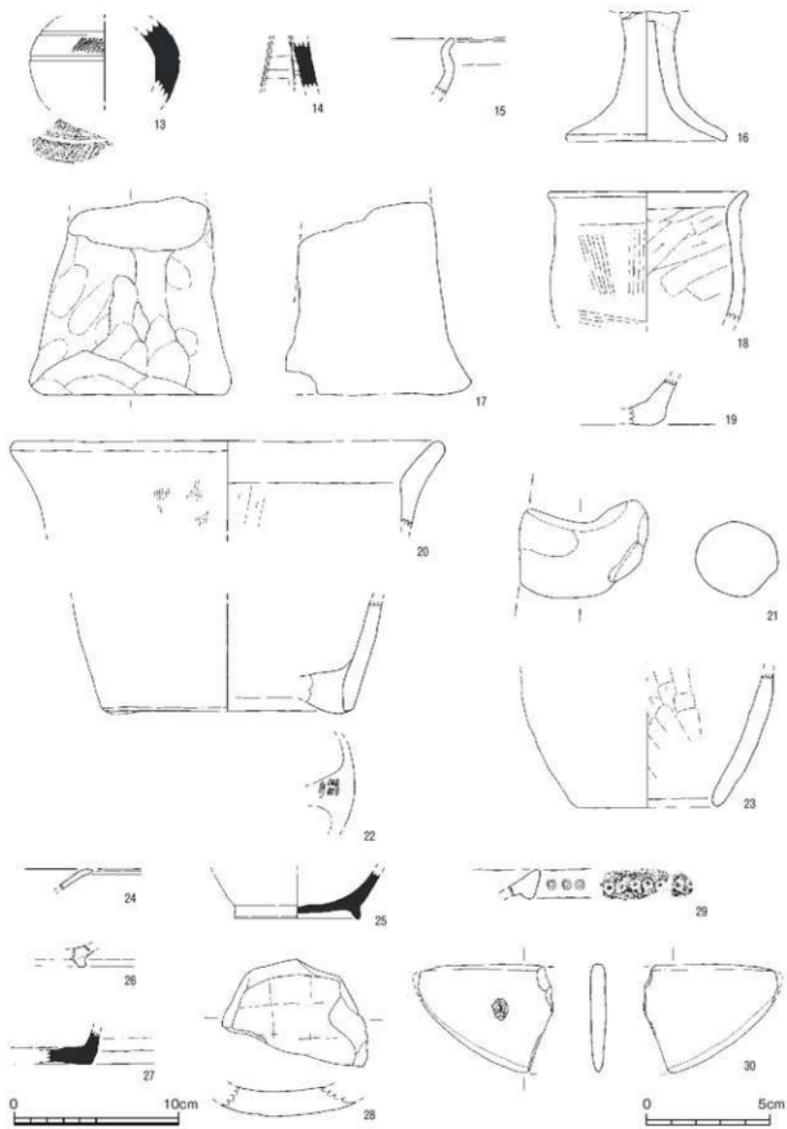
第7図 SC045実測図 (S=1/50)



第8図 SC045 掘方実測図 (S=1/50)



第9図 SC045 出土須恵器実測図 (S=1/3)



第10図 SC045 出土遺物実測図 (30はS=1/2、他はS=1/3)

行った(本書第V章第1節)。SB224 (SD011)・SK018を切る。

**出土遺物(第17図、図版12)** 土師器の壺(60・61)・甕(62)・高坏(63)・板状木製品(64)などが出土した。64は、スギ等針葉樹の柾目取り材で、幅4cm・高さ0.7cmの削り出し部を持っており、組物部品と考えられる。その他、土師器・須恵器小片・花崗岩片がコンテナケース半箱分出土した。遺物から遺構の時期は、6世紀代と考える。

#### 円形土坑

##### SK018 (第16図、図版8)

1区で確認した円形土坑である。径70～80cm、深さは18cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。SE019に切られる。図化に耐えない土師器片が少量出土した。

##### SK077 (第14図、図版7-23)

1区で確認した円形土坑である。北側を攪乱に、東側をSD012に切られており、規模・構造は不明である。埋土は黒褐色粘質土である。SK056との切り合いは不明であるが、一連の関連遺構の可能性もある。図化に耐えない土師器・須恵器片が少量出土した。

##### SK214 (第16図、図版9)

2区で確認した円形土坑である。径70～80cm、深さ55cmを測る。底面上5cmから甕(65)が出土した。SC180に切られる。SK208・SD210などと一連で、堅穴建物の付属土坑の可能性もある。

**出土遺物(第17図、図版12)** 甕(65)・坏(66)が出土した。その他、土師器小片が少量出土した。遺物から遺構の時期は、6世紀代と考える。

##### SK141 (第16図)

2区で確認した円形土坑である。径60～70cm、深さ25cmを測る。SD144を切る。

**出土遺物(第17図、図版13)** 67は白磁碗Ⅲ類で、見込みの軸を環状に掻き取る。その他、図化に耐えない土師器・須恵器片が少量出土した。遺物から遺構の時期は12世紀後半と考える。

#### 溝

##### SD012 (第18図、図版9)

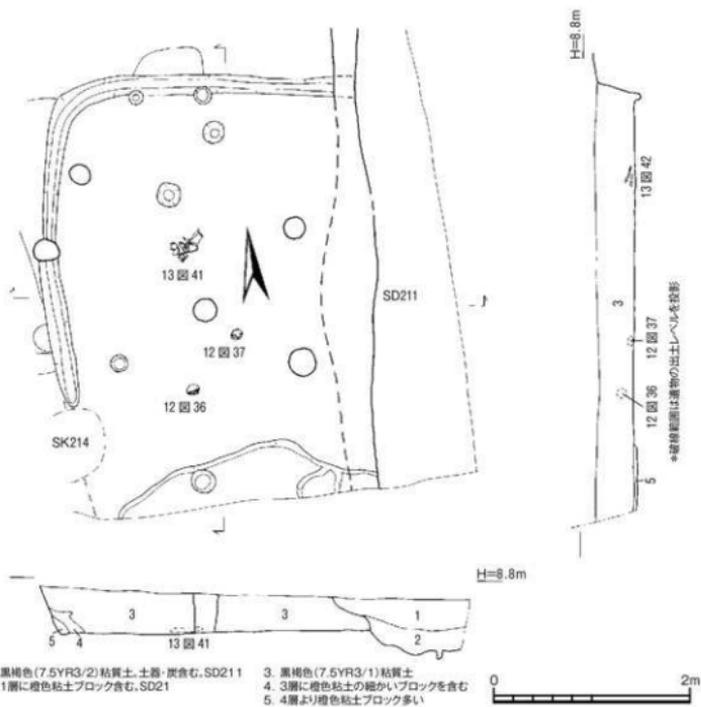
1区で確認した北北西軸の直進する溝である。幅50～60cm、残存長5.55m、深さ15～20cmを測り、断面形は緩やかなU字形で、長軸は南側へわずかに傾斜する。埋土は灰褐色粘質土～褐色シルト質粘土で、黒褐色粘質土、橙色粘土(地山)の細かいブロックを含む。SK014・056・077を切る。

**出土遺物(第19図)** 須恵器の甕(68)・坏(69)・高坏(70)、土師器把手(71)が出土した。この他、土師器・須恵器・黒曜石片・玄武岩片などが出土した。遺物から遺構の時期は7世紀代と考える。

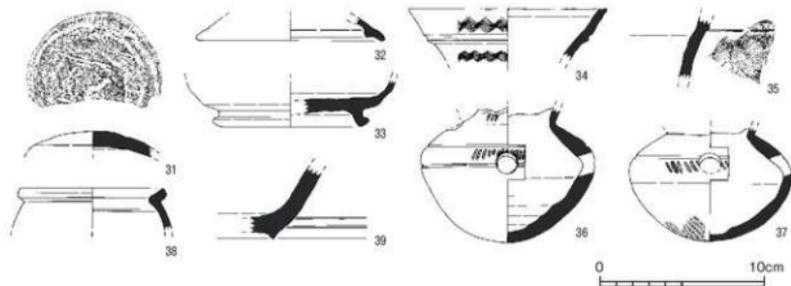
##### SD207 (第18図、図版6-18)

1・2区で確認した東西軸に直進する溝である。幅は75～85cm、残存長5.5m、深さを20～30cmを測る。断面形は逆台形で、長軸は西側へ傾斜する。埋土は黒褐色粘質土で、わずかに灰色味、砂質が強い。SC045を切る。SC045との埋土の違いが不明瞭で、取り上げ遺物の混在を否定できない。

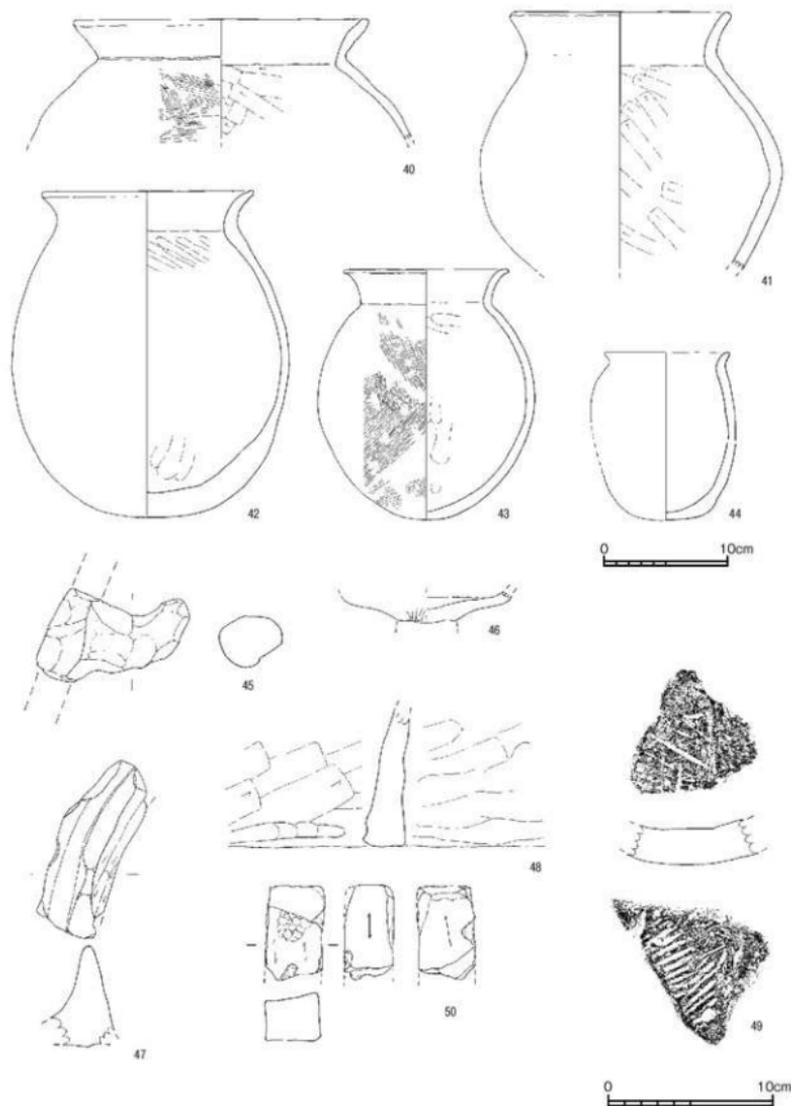
**出土遺物(第19図、図版13)** 須恵器甕(72)・高坏(73)、土師器甕(74)、黒色土器A類焼(75)が出土



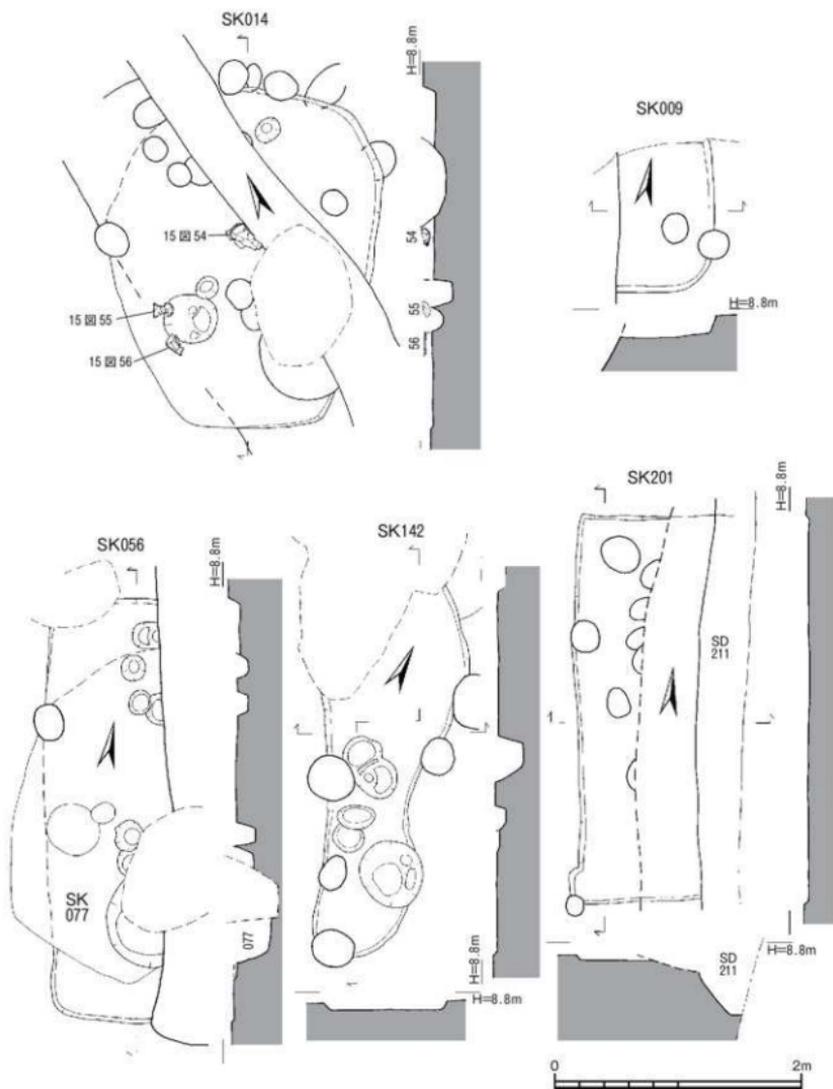
第11図 SC180実測図 (S=1/50)



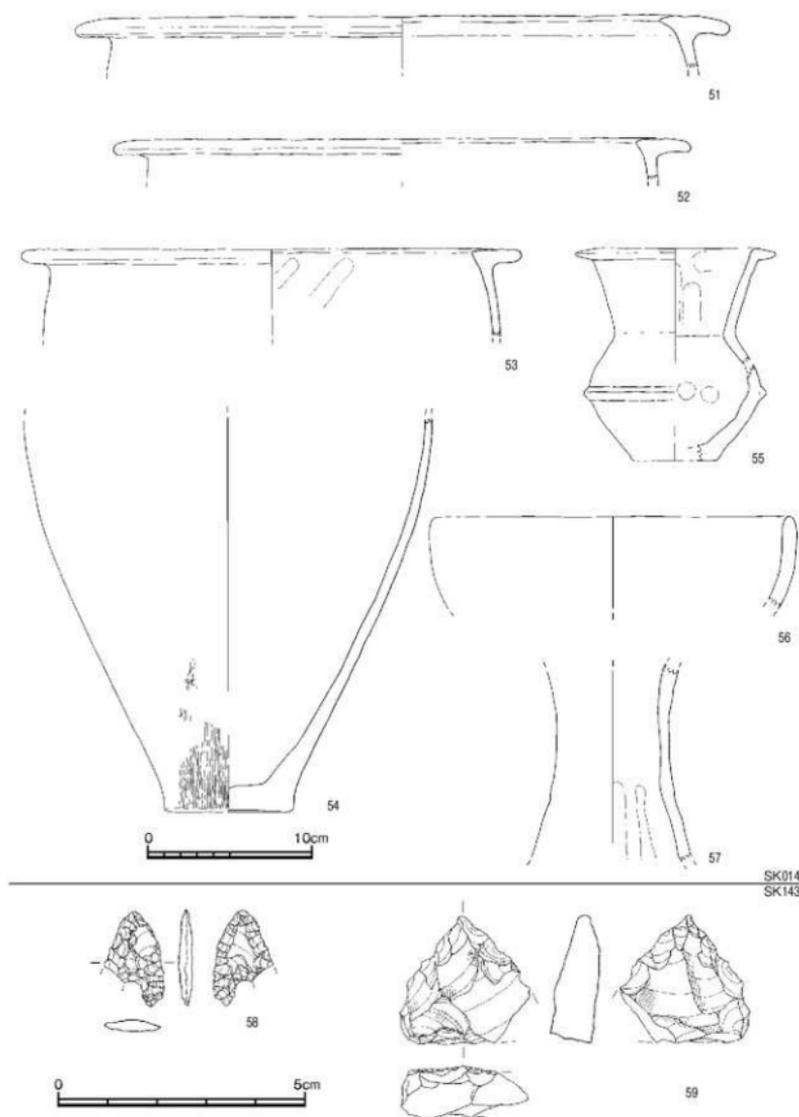
第12図 SC180出土須恵器実測図 (S=1/3)



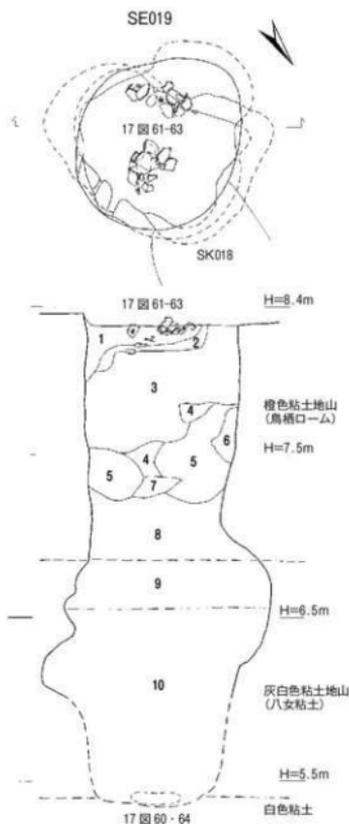
第13図 SC180出土遺物実測図 (40～44はS=1/4、他はS=1/3)



第14图 SK 实测图 (S=1/40)

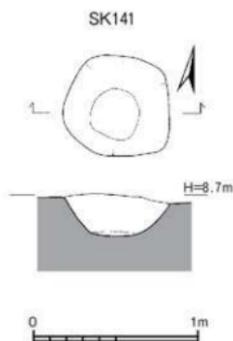
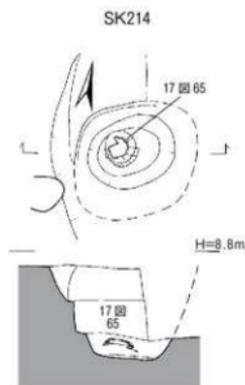
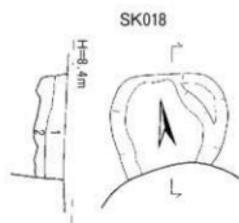


第15図 SK014・143出土遺物実測図 (58・59はS=1/1、他はS=1/3)

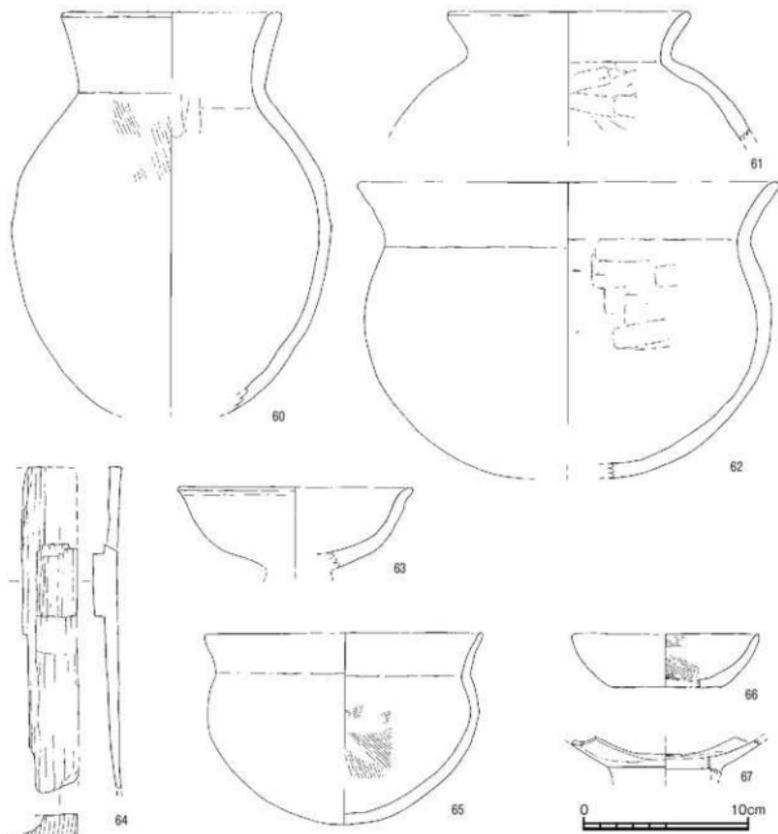


1. 黒褐色(10YR2/2)粘質土。しまり強い。棕色粘土粒。土器片を多く含む。
2. 褐色(7.5YR5/6)粘土
3. 黒褐色(10YR2/2)粘質土。棕色粘土ブロックを散漫に含む
4. 褐色(7.5YR6/6)粘土
5. 黒褐色(10YR3/1)砂質粘土
6. 褐色(7.5YR6/6)砂質粘土
7. 黒褐色(10YR3/1)粘土
8. だいぶ褐色(7.5YR5/4)砂質粘土。黒褐色粘土をブロック状に含む
9. だいぶ黄褐色(10YR4/3)砂質粘土。明黄褐色砂質粘土をブロック状に含む
10. 黒褐色(2.5Y3/1)粘土

1. 黒褐色-黒灰色(7.5YR2/2)粘質土
2. 1層に深い黄褐色(5YR5/4)粘土層土



第16図 SE019、SK実測図 (S=1/30)



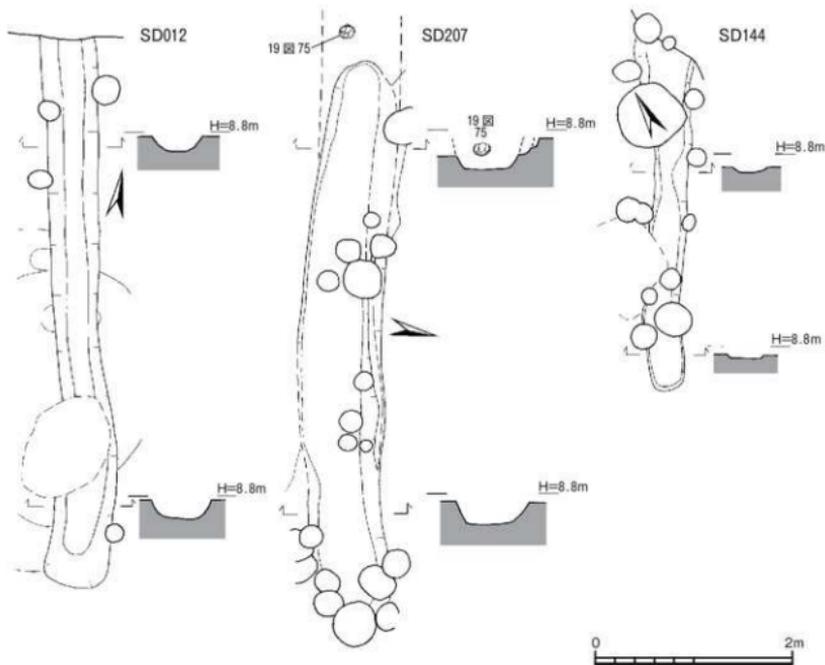
60-64 SE019 65-66 SK214 67 SK141

第17図 SE019・SK214・SK141 出土遺物実測図 (S=1/3)

した。75は調査時にはSC045出土として取り上げたが、ここではSD207に帰属するものとして報告する。この他、土師器・須恵器片が出土した。遺物は7世紀代の様相を示すが、75は9世紀初頭と考える。

#### SD210 (第7図)

2区で確認した東西方向に走る細溝である。幅20cm、深さ15cmを測る。同類の溝が北側に併走する。西側をSC045に、東側をSC180に切られる。SK208・SK214と一連で、堅穴建物の一部の可能性もある。**出土遺物(第19図)** 須恵器坏蓋(76)、土師器甕(77)が出土した。その他、土師器片が出土した。遺物から遺構の時期は、6世紀代と考える。6世紀後半のSC045に切られる層位関係とも矛盾はない。



第18図 SD実測図 (S=1/50)

#### SD211 (第3図、図版9)

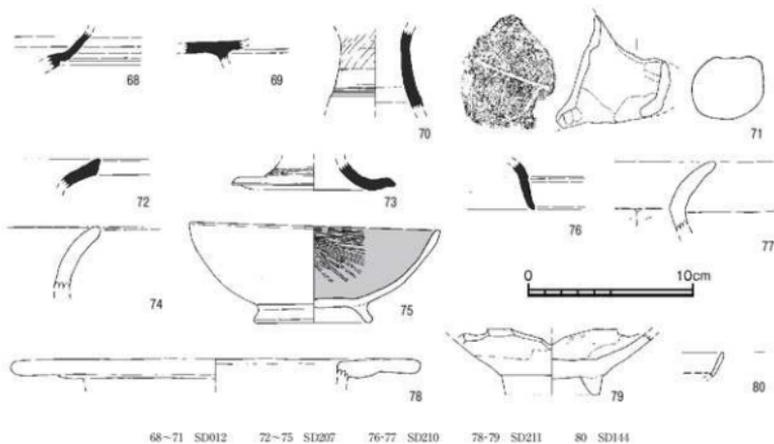
2区で確認した北北東軸の溝である。残存する部分で、幅1m、長さ12m、深さ60cmを測る。断面形は段を有する逆台形で、南側へ傾斜する。SK201・SC180を切る。埋土は黒褐色(7.5YR3/2)粘質土で、SC180埋土の黒褐色(7.5YR3/1)粘質土よりわずかに淡い(第11図土層)。

**出土遺物(第19図、図版13)** 土師質の鍋(78)、白磁椀Ⅶ類(79)が出土した。79は底部外面露胎で、やや細かい貫入がみられる。その他、土師器・須恵器・土師質土器・滑石片が出土した。遺物からは遺構の時期は判然としないが、白磁椀の時期によれば12世紀後半ごろと考える。

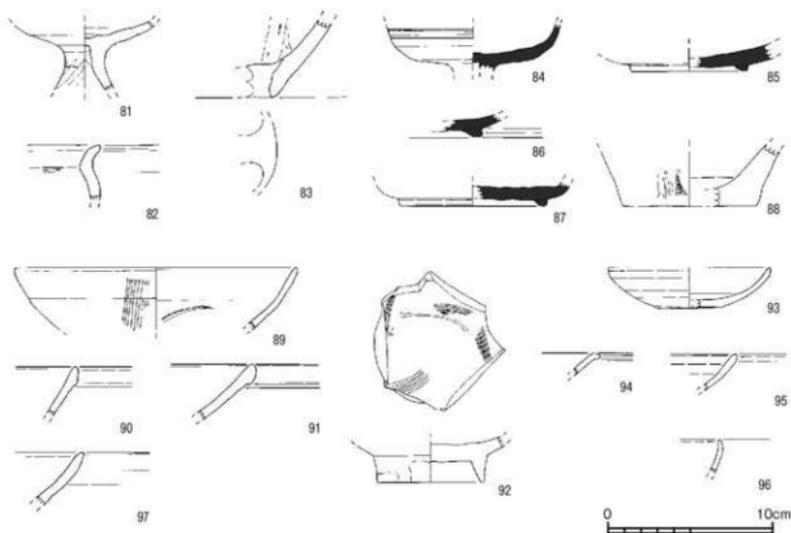
#### SD144 (第18図、図版9)

2区で確認した北東軸の溝である。幅40～60cm、残存長さ3.6m、深さ5cmを測る。北側へわずかに傾斜する。SK141に切られる。

**出土遺物(第19図)** 80は白磁皿Ⅶ類である。この他、土師器・土師質土器片が少量出土した。遺物から遺構の時期は11世紀後半～12世紀前半と考える。12世紀後半のSK141に切られる層位関係とも矛盾はない。



第19図 SD出土土器実測図 (S=1/3)



81 SP058    82・83 SP065    84 SP093    85 SP102    88 SP112  
 87 SP219    88 SP158    89 SP194    90 SP037    91 SP168    92 SP099  
 93 SP047    94 SP150    95 SP114    96 SP106    97 SP136

第20図 SP出土土器実測図 (S=1/3)

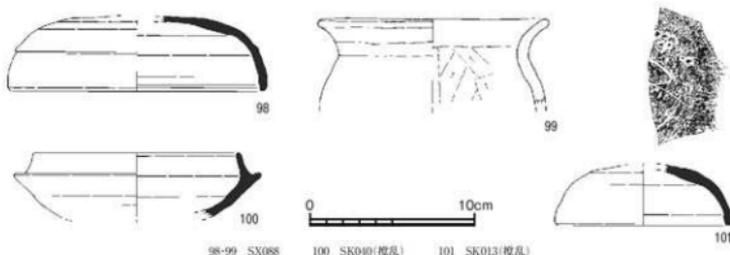
## 柱穴 出土遺物(第20図、図版13)

柱穴は約180基を確認した。平面円形で、径は20cm前後の小型と40cm前後の中型に分けられる。深さは10～60cmほどである。埋土は褐灰色粘質土と黒褐色粘質土に分けられる。黒褐色粘質土は小型柱穴に多い傾向がみられる。柱痕跡はほとんど確認できなかったが、底面で柱の当たりを確認したものもある。出土遺物は土師器小片が多い。柱穴の規模・埋土・出土遺物・位置関係から掘立柱建物の復元を試みたが、時間の制約もあり、明確な根拠をもって立てることができなかった。遺物から柱穴の時期は、古墳時代後期・6世紀代～12世紀後半を想定できる。以下では、須恵器・陶磁器など時期比定が可能な遺物が出土した柱穴を中心に報告する。

SP058 (1区・小型) SC045を切る。81は土師器の須恵器模倣高坏である。SP065 (1区・中型) SC045主柱穴。82は小型壺、83は瓶である。SP093 (2区・中型) 他ピットに切られる。84は須恵器高坏である。SP102 (2区・小型) 85は須恵器高台坏である。SP112 (2区・小型) 86は須恵器高台坏である。SP219 (2区・小型) SK201を切る。87は須恵器高台坏である。SP158 (2区・中型) 88は弥生土器甕である。SP194 (2区・小型) 89は同安窯系青磁碗 I-1b類(12世紀中頃～後半)である。やや大きい貫入がみられる。SP037 (1区・小型) SD207を切る。90は白磁碗Ⅳ類(11世紀後半～12世紀前半)である。軸にはやや細かい貫入がみられ、器面は被熱している。SP168 (2区・小型) 91は白磁碗Ⅳ類(11世紀後半～12世紀前半)である。SP099 (2区・中型) 92は白磁碗Ⅴ-4類(12世紀中頃～後半)である。内面に櫛目文がみられる。SP047 (1区・小型) SC045を切る。93は白磁皿Ⅵ-1b類(11世紀後半～12世紀前半)である。軸に細かい貫入がみられ、底外面は露胎である。SP150 (2区・小型) 94は白磁皿Ⅳ-2類(11世紀後半～12世紀前半)である。SP114 (2区・小型) 95は白磁皿Ⅵ類(11世紀後半～12世紀前半)である。SP106 (2区・小型) 北半未掘。96は白磁皿Ⅶ類(11世紀後半～12世紀前半)である。やや細かい貫入がみられる。被熱する。SP136 (2区・小型) SD144を切る。97は瓦器椀である。SP166 (2区・中型) 102 (図版13-45)は椀形鉄滓である。

## 包含層、攪乱出土遺物(第21図)

98は須恵器坏蓋、99は土師器甕で、1区・SC045南側に堆積した包含層SX088から出土した。100はSC045を切る攪乱SK040から出土した須恵器坏身である。101はSD012を切る攪乱SK013から出土した須恵器坏蓋である。



第21図 SX088、攪乱出土土器実測図 (S=1/3)

第1表 出土遺物観察表

押印番号	図版番号	遺構	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土・材質	焼成	色調
6	1	10 37	(SD084) SB224	土師器	壺	小片	径1mm程度の白色砂粒を少し含む	良好	橙(2.5YR6/8)
6	2	10 37	(SD084) SB224	土師器	鉢	1/3	径1mm程度の白色砂粒・黒色粒を含む	良好	黄橙(7.5YR7/8)と橙(5YR6/8)のまじり
6	3	10 37	(SD084) SB224	土師器	高坏	1/5	径2mm以下白色粒、黒色粒、黒雲母や多い	良好	浅黄橙(10YR8/4)
6	4	27頁写真1	SD084	ガラス製品	碧玉	完形	径0.297、長さ1.202、孔径0.153、重量0.127g、体積0.061、比重2.082		微細な筋が入る
9	5	10 38	SC045 R-3	須恵器	坏蓋	1/6	径元口径14、器高(4.3)		径3mm以下の白色砂粒を含み、径1mm以下の黒色粒が多い
9	6		SC045 SEIX	須恵器	壺蓋	1/5	径元口径10		径1mm以下白色砂粒稀少
9	7	10 38	SC045 NWIX	須恵器	坏蓋	1/4	径元口径15.8、器高(3.6)		径3mm以下白色粒を含む、径1mm以下黒色粒やや多い
9	8		SC046 SWIX	須恵器	坏蓋	小片			径3mm以下白色粒を含む、径1mm以下黒色粒わずかに含む
9	9		SC045 SEIX	須恵器	坏身	小片			径1mm以下の黒色粒を少し含む
9	10	10 38	SC045 SWIX	須恵器	坏身	1/6	径元口径13、最大径16、器高(4)		径1mm以下の白色砂粒を少し含む、径1mm以下の黒色粒を含む
9	11	10 38	SC045 P-2+NWIX	須恵器	坏身	略完形	口径11.8、最大径14.2、器高4.9		径2mm以下の白色砂粒、黒色粒を含む
9	12		SC045	須恵器	坏	1/4	最大径13.6、器高(4)		径1mm程度の砂粒を少し含む
10	13	10 38	SC045 NWIX	須恵器	鉢	1/4	最大径8.9		径2mm以下の白色砂粒を含み、径1mm程度の黒色粒を少し含む
10	14		SC045 NWIX	須恵器	高坏	1/3			径1mm以下の白色砂粒、黒色粒を含む
10	15		SC045 NWIX	土師器	鉢	小片			径3mm以下の白色砂粒をやや多く含む、雲母をわずかに含む
10	16	10 38	SC045	土師器	高坏	1/6	接続部径3.5、下腹部径9.6、器高7.8		径1mm程度の白色砂粒を含む
10	17	10 38	SC045 カマド	土師器	支脚	3/4	幅12.1、器高(12)		径7mm以下の白色砂粒が多い
10	18	10 38	SC045	土師器	壺	1/5	口縁部径12、胴部最大径11.7		径1mm白色粒、黒色粒を含む、径1mm雲母片をわずかに含む
10	19		SC045 貼灰	土師器	甌	小片			径3mm以下の白色砂粒を含む
10	20		SC045 NWIX	土師器	甌	1/10	径元口径16.2		径4mm以下の白色砂粒をやや多く含む、径1mm黒色粒、雲母を含む
10	21		SC045	土師器	甌・壺	把手部			径4mm以下の白色砂粒が多い
10	22		SC045 NWIX	土師器	甌	1/8			径2mm以下白色粒多い、径1mm以下の黒色粒を含む
10	23		SC045	土師器	甌	1/5	底部径8.4		径5mm以下の白色砂粒多い、径3mm以下の黒色粒多い
10	24		SC045 土甌	白磁	皿	小片			径1mm以下の黒色粒を含む
10	25		SC045 NWIX	須恵器	高台付椀	1/2	高台径7.6、高台高0.7		2mm以下白色砂粒少
10	26		SC045 SEIX	土師器	高台坏	小片			径1mm以下の白色砂粒を含み、径1mm以下の黒色粒をわずかに含む
10	27		SC045 SEIX	須恵器	鉢	小片			径1mm以下の白色砂粒、黒色粒を含む、黒色粒を少し含む
10	28		SC045 NWIX	瓦(土師器)	平瓦	1/10			径3mm以下の白色砂粒多い、微細な雲母多い
10	29		SC045 NEIX 排土	弥生土器	壺	小片			径2mm以下白色砂粒やや多、径1mm程度黒色粒
10	30		SC045	石器	石而丁	1/3	長さ(5.5)、幅(4.4)、厚さ0.6、孔径長1.8、重量(19.6g)		砂岩(黒色、珪晶目立つ)
12	31	11 39	SC180 NEIX	須恵器	壺	1/2			径1mm以下の白色砂粒を少し含む
12	32		SC180 NEIX	須恵器	壺	1/8			径1mm以下の砂粒を含む、径1mm以下の黒色粒を少し含む
12	33	11 39	SC180 SEIX	須恵器	高台坏	1/2			2mm以下の白色砂粒、径1mm以下の黒色粒を少し含む

揮出番号	図版番号	遺構	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土・材質	焼成	色調		
12	34	11	39	SC180 上層	須恵器	罐	1/7		径1mm以下の白色砂粒・黒色粒を含む	良好	暗灰(N3?)～灰白(7.5Y7/1)、 断面にふい黄褐(2.5YR5/3)
12	35	11	39	SC180 ヘルトN	須恵器	罐	小片		径1mm以下の白色砂粒・黒色粒をわずかに含む	良好	暗灰黄(2.5Y5/2)
12	36	11	39	SC180 R-1	須恵器	罐	2/3	胴部最大径10.5、 穿孔孔径1.3	径2mm以下の白色砂粒・微細な黒色粒を含む	良好	青灰(10BGS/1)、 断面-灰赤(7.5R5/2)
12	37	11	39	SC180 R-3	須恵器	罐	2/3	胴部最大径9.8、 穿孔孔径1.4	径2mm以下の白色砂粒と径1mm程度の黒色粒を含む	良好	青灰(5B5/1)
12	38	11	39	SC180 上層	須恵器	短頸壺	1/6	復元口径8.7	径1mm以下の黒色粒多い	良好	灰白(5Y7/1)
12	39	11	39	SC180 上層	須恵器	鉢	1/10		径1mm以下の白色砂粒をわずかに含む	良好	青灰(5B5/1)
13	40			SC180 SW区	土師器	壺	1/5	口径23.8、胴部径20	径4mm以下の白色砂粒多い、 径2mm以下の黒色粒を含む、 角閃石をわずかに含む	良好	橙(2.5YR7/8)
13	41	11	39	SC180 R-2	土師器	壺	1/2	口径17.8、胴部径15.4、 胴部最大径24.3	径3mm以下白色粒多い	良好	明赤褐(10YR7/6)・ 橙(5YR6/8)
13	42	11	39	SC180 ヘルトN+ NE区	土師器	壺	3/4	口径17.1、胴部径14.5、 胴部最大径21.8、 器高26.6	径3mm以下白色粒多い	良好	橙(7.5YR7/6)
13	43	11	39	SC180 NE区	土師器	壺	2/3	口径13.3、胴部径10.5、 胴部最大径17.5、 器高20.3	径3mm以下白色粒多い	良好	浅黄橙(7.5YR6/6)・ 橙(5YR6/8)
13	44			SC180 ヘルトN+ SE-NW区	土師器	小型罐	略完形	復元口径10～10.5、 最大径11.5、胴部径9.4	径6mm以下の白色砂粒多い	やや 不良	浅黄橙(10YR8/3)
13	45			SC180 SE区	土師器	瓶・罐	把手部		径4mm以下白色粒やや多く、 径1mm以下黒色粒多く、径1mm以下の雲母をわずかに含む	良好	にふい黄褐(10YR6/4)
13	46			SC180 SE区	土師器	高杯	1/5		径2mm以下の白色砂粒をやや多い	良好	橙(7.5YR7/6)
13	47			SC180 SE区	土師器	移動式壺	小片		径2mm以下白色粒、径1mm金雲母多い	良好	にふい黄褐(10YR6/4)
13	48	11	39	SC180 SE区	土師器	移動式壺	小片		径3mm以下白色粒少なく含み、 径1mm金雲母多い	良好	にふい黄褐(10YR6/4)
13	49	11	39	SC180 SE区	瓦(土師黄)	平瓦	小片		径2mm以下の白色砂粒を含む	良好	橙(5YR7/8)
13	50			SC180 ヘルトS	石器	磁石	1/2	長さ(5.7)、幅3.3、 厚さ2.9、重量(94.0)g	シルト質砂岩		黄褐(2.5YR5/3)
15	51	12	40	SK014 (分析1)	弥生土器	壺	小片		径4mm以下の白色砂粒多い	良好	橙(2.5YR6/8～7.5YR6/6)
15	52			SK014 (分析3)	弥生土器	壺	小片		径2mm以下の白色砂粒多い	良好	灰白(2.5YR8/2)、 外面にやや赤みを残す (浅黄橙7.5YR6/3)
15	53	12	40	SK014 (分析2)	弥生土器	壺	1/8	復元口径30.2	径2mm以下の白色砂粒を少し含む	良好	黄橙(10YR8/6)
15	54	12	40	SK014 R-3	弥生土器	壺	1/8	底径7.3	径5mm以下の白色砂粒多い、 径1mm程度の黒色粒を含む	良好	外面-橙(2.5YR6/6)、 内面-橙(7.5YR7/6)
15	55	12	40	SK014 R-2	弥生土器	小型壺(広口)	1/3	口径12、胴部径7.2、 胴部最大径10.3、底径4.8、 器高(13)	径3mm以下の白色砂粒を多く含み、 径1mm程度の黒色粒をわずかに含む	良好	橙(5YR7/6)
15	56	12	40	SK014	弥生土器	鉢	1/7	復元口径22.2	径3mm以下の白色砂粒多い	良好	橙(7.5YR7/6)
15	57	12	40	SX057	弥生土器	器台	1/3		径3mm以下の白色砂粒多い	良好	橙(5YR6/8)
15	58			SK143	石器	打製石鏃	脚欠損	長さ1.95、幅1.2、 厚さ2.5、重量(0.4)g	黒曜石		
15	59			SK143	石器	使用痕剥片	刃部欠損	長さ2.6、幅(2.6)、 厚さ0.9、重量5.9g	黒曜石		
17	60	12	41	SE019 最下層	土師器	壺	1/3	口径13.1、胴部径11.2、 胴部最大径19.1	径4mm以下白色粒多い	良好	橙(2.5YR7/8)
17	61	12	41	SE019 上層	土師器	壺	1/4	復元口径14.5、 胴部径12.2	径2mm以下白色粒やや多い、 黒雲母少なく含む	良好	浅黄橙(2.5YR6/6)
17	62	12	41	SE019 上層	土師器	壺	1/2	復元口径25.4、 胴部径22.0、器高16	径2mm以下白色粒少なく含む	良好	橙(7.5YR7/6)
17	63	12	41	SE019 上層	土師器	高杯	1/2	口径14	径1mm以下白色粒・黒色粒少なく含む	良好	橙(5YR6/6)
17	64	12	41	SE019 最下層	木器	板状木製品	1/3	残存長19.7、残存幅3.3、 厚さ0.7～1.4	針葉樹		
17	65	12	42	SK214	土師器	壺	1/8	復元口径16.7、 胴部径15.4、 胴部最大径16.3、 器高11.7	径4mm以下の白色砂粒を含む	良好	橙(5YR7/8)
17	66	13	43	SK214	土師器	杯	1/3	復元口径11.3、底径6.6、 器高3.3	径1mm以下の白色砂粒を少し含む	良好	橙(7.5YR7/6)

挿入番号	図版番号	遺構	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土・材質	焼成	色調	
17	67	13 43	SK141	白磁	碗	1/6	高台径6.9	径1mm以下黒色粒を含む	良好	胎土：ぶいり黄橙(10YR6/3)、 釉：灰白(5Y5/1)
19	68		SD012	須恵器	罐	小片		径1mm以下白色粒をわずかに含む	良好	灰オリーブ(5Y6/2)
19	69		SD012	須恵器	高台杯	小片		径3mm以下の白色砂粒をやや多い	良好	青灰(5B6/1)
19	70		SD012	須恵器	高杯	1/3		径2mm以下の白色砂粒をやや多い	良好	暗青灰(5B4/1)
19	71		SD012 北区	土師器	瓶・壺	把手部		径4mm以下白色粒、金雲母や や多く、黒炭母を含む	良好	灰黄褐(10YR5/2)
19	72		SD207	須恵器	壺	小片		径1mm以下黒色粒を少し含む	良好	黄灰(2.5Y5/1)
19	73		SD207	須恵器	高杯	小片	復元口径9.8	径1mm程度の白色砂粒をわずかに含む	良好	黒(10Y2/1)
19	74		SD207	土師器	壺	小片		径4mm以下の白色砂粒をやや多い	良好	橙(7.5YR7/6)
19	75	13 44	SD207 R-1	黒色土器 A	瓶	略完整	口径15.1、高台径7.1、 器高6.1	径3mm以下の白色砂粒をやや多い	やや不良	外面 灰白(2.5Y8/2) 主体で 口縁付近が黒(7.5YR2/1)
19	76		SD210	須恵器	坏蓋	小片		径1mm程度の白色砂粒をわずかに含む、径1mm以下の黒色粒を含む	良好	青灰(5B5/1)
19	77		SD210	土師器	壺	小片		径4mm以下の白色砂粒をやや多い	良好	橙(2.5YR6/6)
19	78	13 43	SD211	土師質	罎	1/6	復元口縁外径2.5	径3mm以下白色粒、径1mm以下金雲母多い	良好	橙(7.5YR6/6)
19	79	13 43	SD211	白磁	碗	1/3	高台径5.6、高台高1.2	径2mm以下黒色粒多い	良好	胎土：灰白(2.5Y8/2)、 釉：明オリーブ灰(2.5GY7/1)
19	80		SD144	白磁	皿	小片		微細黒色粒を含む	良好	胎土：灰黄(2.5Y7/2)
20	81		SP058	土師器	高杯	1/2		径4mm以下の白色砂粒を少し含む	良好	橙(5YR7/6)
20	82		SP065	土師器	小型壺	1/10		径1mm以下の白色砂粒を少し含む	良好	橙(5YR6/6)
20	83		SP065	土師器	瓶	1/10		径1mm以下の白色砂粒を含む	良好	橙(5YR7/8)
20	84		SP093	須恵器	高杯	1/5		径1mm程度の白色砂粒を含む	良好	灰(2.5Y7/1)
20	85		SP102	須恵器	高台杯	1/4	復元高台径6.9	径3mm以下白色粒を含む	良好	ぶいり黄橙(10YR7/2)
20	86		SP112	須恵器	高台杯	小片		径1mm白色砂粒をわずかに含む	やや不良	灰白(2.5Y7/1)
20	87		SP219	須恵器	高台杯	1/5		径1mm白色粒をわずかに含む、径1mm程度の黒色粒を少し含む	やや不良	灰白(7.5YR8/1)
20	88		SP158	弥生土器	壺	1/3		径2mm以下の白色砂粒多い	良好	浅黄橙(7.5YR8/4)
20	89	13 46	SP194	青磁	碗	1/10	復元口径17.1	微細黒色粒を含む	良好	胎土：灰白(2.5Y7/1)、 釉：明緑灰(10GY7/1)
20	90	13 46	SP037	白磁	碗	小片		精良	良好	胎土：灰白(10YR8/2)、 釉：浅黄(2.5Y7/3)
20	91	13 46	SP168	白磁	碗	小片		微細黒色粒を含む	良好	胎土：灰白(10YR8/1)、 釉：灰白(2.5Y8/1)
20	92	13 46	SP099	白磁	碗	2/3	高台径6.4、高台高1.6	径1mm以下黒色粒を含む	良好	胎土：灰白(2.5Y8/2)、 釉：灰白(2.5Y8/1)
20	93	13 46	SP047	白磁	皿	1/8	復元口縁外径9.8、 底径3.8、器高2.5	微細黒色粒を含む	良好	胎土：灰白(2.5Y8/1)、 釉：灰白(2.5Y8/1)
20	94		SP150	白磁	皿	小片		径1mm以下黒色粒を含む	良好	胎土：灰白(2.5Y8/1)、 釉：灰白(2.5Y8/1)
20	95		SP114	白磁	皿	小片		精良	良好	胎土：明褐灰(7.5YR7/1)、 釉：ぶいり黄橙(10YR6/4)
20	96		SP106	白磁	皿	小片		微細黒色粒を含む	良好	胎土：灰白(10YR8/2)、 釉：明オリーブ灰(2.5GY7/1)
20	97	13 46	SP136	瓦器	碗	小片		径1mm黒色粒少なく含む	良好	灰黄褐(10YR5/2)
21	98		SX088	須恵器	坏蓋	1/6		径3mm以下の白色砂粒、径1mm程度の黒色粒を含む	良好	外面-灰(N6)、 内面-青灰(5B6/1)
21	99		SX088	土師器	壺	1/5		径3mm以下の白色砂粒、径1mm程度の黒色粒を含む	良好	褐灰(7.5YR4/1)と 橙(7.5YR6/6)のまじり
21	100		SK040	須恵器	坏身	1/4	復元口径12.4、 最大径15	径1mm程度の黒色粒多い	良好	灰(5Y6/1)
21	101		SK013	須恵器	壺	1/3	復元口径10.6	径3mm以下の白色砂粒を含む	良好	暗青灰(5B4/1)
102	13 45		SP166	鉄製品	鉄淨		長さ5.17、幅2.2、 厚さ2.15、重量26.6g			

## 第V章 自然科学分析

### 第1節 弥生土器および粘土の胎土分析

石田智子<sup>1</sup>・米村和祐<sup>2</sup>・足立達朗<sup>3</sup>・中野伸彦<sup>3</sup>・小山内康人<sup>3</sup>・田中良之<sup>1</sup>

1九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座 2九州大学大学院比較社会文化学府

3九州大学大学院比較社会文化研究院地球変動講座

#### 1. はじめに

本稿では、福岡市教育委員会からご提供いただいた那珂遺跡出土弥生土器3点および那珂遺跡採取白色粘土（阿蘇-4火砕流堆積物）の分析結果を報告する。分析資料・方法の詳細および考察については、石田ほか（2012）を参照されたい。

#### 2. 資料と方法

資料は、第130次調査で検出された弥生土器および白色粘土である。土器は、SK014土坑から出土した、遠賀川以西系須玖式土器の中型の甕形土器3点である。時期は、弥生時代中期中頃～後半（須玖I式新段階～須玖II式古段階）に相当する。白色粘土は、SE019井戸（六世紀頃）の最下面（標高約5.5m）で検出された阿蘇-4火砕流堆積物（八女粘土）である。

分析は、蛍光X線分析装置で主要10元素（wt%）・微量12元素（ppm）、レーザー溶出型誘導結合プラズマ質量分析計で希土類元素（REE：ppm）を測定した。

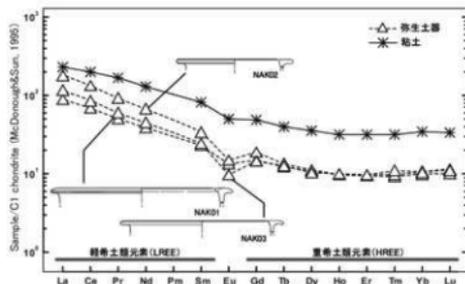
#### 3. 分析結果（第22図）

①重希土類元素存在度パターンの整合性から、那珂遺跡出土弥生土器はいずれも白色粘土（阿蘇-4火砕流堆積物）を原材料に使用した可能性が高い。ただし、粘土と弥生土器では希土類元素を含む相対量が異なることから、土器の元素組成に混和材の種類・配合量が大きく影響することが指摘できる。

②弥生土器は、軽希土類元素存在度パターンがそれぞれ異なり、多様なパターンを示す。この解釈に関しては、遺跡の性格や立地条件を考慮する必要がある、分析資料を増やした上で再検討する。

#### 4. おわりに

那珂遺跡では、同一遺跡で検出された土器および粘土を合わせて分析することで、土器生産における原材料採取に対するアプローチを行うことが可能となった。しかし、分析数が未だ少ないため、今後さらに資料を収集し、分析事例を蓄積することが重要である。



第22図 弥生土器および粘土の希土類元素存在度(REE)パターン

#### 参考文献

石田智子・米村和祐・足立達朗・中野伸彦・小山内康人・田中良之（2012）「那珂川・御笠川流域における弥生土器および粘土の胎土分析」、榎本義嗣編『久保園遺跡4』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1148集）、福岡市教育委員会

謝辞：那珂遺跡出土土器の資料収集および報告にあたっては、福岡市教育委員会の板倉有大氏に御協力いただきました。本筆ながら記して感謝の意を表します。本研究は、平成22-23年度九州大学教育研究プログラム研究拠点形成プロジェクト(P&P)「高精度元素・同位体分析システムを用いた原始古代人口移動・物流ネットワークの研究」(代表：田中良之)の成果の一部である。

## 第2節 ガラス管玉について

西澤千絵里（福岡市埋蔵文化財センター）

那珂130次調査出土ガラス管玉は細身で透明感のある青紺色を呈し、表面は孔の方向に沿って白・灰色の筋が見られ、端部は欠けたようにいびつである。本稿では、那珂130次調査出土ガラス管玉の実体顕微鏡による製作技法調査と蛍光X線分析装置を使用した材質調査の結果を報告する。

①実体顕微鏡による製作技法の調査 微細な筋が全体に見られる点や、表面や内部に黒・青灰色の内容物が存在する点が確認できた。筋には凹凸があり、気泡が細長く伸びた痕跡であると思われる。この気泡筋から、熔けたガラスを引き伸ばして玉を製作する引き伸ばし法の使用が想定される。引き伸ばし法のガラス小玉には気泡筋のほか、気泡や気泡列が見られることが多く、これらの気泡・気泡列は引き伸ばした管ガラスを切断し、再加熱して破断面を丸く加工した際の痕跡と考えられている〔小瀬1987〕。しかし、本資料には気泡や気泡列は見られず、端部が滑らかでない状況を考えると、再加熱が長時間行われていない、もしくは再加熱を行っていない可能性が指摘できる。

②蛍光X線分析装置による材質調査 分析はエネルギー分散型蛍光X線分析装置を使用しておこなった<sup>1)</sup>。その結果、アルミニウム (Al)、ケイ素 (Si)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、コバルト (Co) の各元素の反応が得られた。ガラスの主成分であるケイ素のほかにカリウムが顕著で、この特徴はこれまでに蓄積された分析結果と照らし合わせるとカリガラス ( $K_2O-SiO_2$ 系) と考えられる。カリガラスの青紺色の着色にはコバルトが使用されており、マンガンはコバルトに含まれる不純物と考えられている〔肥塚2003〕。本資料もマンガンを含むコバルトによる着色がほどこされたものと思われる。

那珂130次調査出土の管玉はコバルト着色のカリガラスを引き伸ばし法で製作したものであることを明らかにすることができた。今回は資料の分析にとどまってしまったが、気泡や端部の状況が引き伸ばし法製作の小玉と若干の差異があった点は、市内の資料と比較・検討を行うことで出土量の少ないガラス管玉の新たな特徴を見いだせるのではないかと期待する。今後の課題としたい。

注) 装置と使用条件は次の通りである。エダックス社製 Eagle  $\mu$ probe / 対陰極: モリブデン (Mo) / 検出器: 半導体検出器 / 印加電圧: 20kV・電流値 415 ~ 500  $\mu$ A / 測定雰囲気: 真空 / 測定範囲 0.3mm  $\phi$  / 測定時間 120 秒)

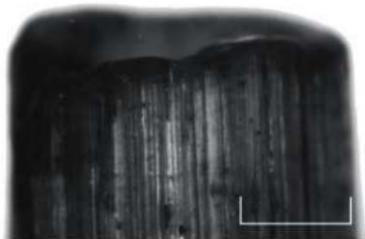
参考文献 ※福岡市内の報告書については紙幅の関係上削愛した。

小瀬康行 (1987) 「管切り法によるガラス小玉の成形」『考古学雑誌』第73巻第2号 日本考古学会

肥塚隆保 (2003) 「日本出土ガラスの考古学研究 —— 古代ガラス材質とその歴史の変遷 ——」『考古学の総合的研究』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター



1. 倍率約6.3倍



2. 倍率約40倍

写真1 ガラス管玉の実体顕微鏡写真 (スケールは1目盛 = 1mm)

## 第Ⅵ章 総括

本調査では、弥生時代中期後半、弥生時代終末期～古墳時代初頭、古墳時代後期、古墳時代終末期～飛鳥時代、奈良・平安時代、中世前期、近世の遺構を確認した。このことから、本地点が、弥生時代から中世まで断続的に集落として利用され、近世以降に耕地利用されていたことが明らかになった。以下では、上述の成果報告を補足しつつ内容を通時的に整理し、総括に代えたい。

**弥生時代** SK014 から弥生時代中期中頃～後半・須玖Ⅱ式古段階の土器が複数器種のセットとして出土した。SK014 の性格は、貯蔵穴もしくは堅穴建物の可能性を指摘できるが、遺構の深さが10cm程度と残りが悪く、詳細は不明である。SK143からは黒曜石製の打製石鎌と使用痕剥片石器が出土した。石器の風化度合いや製作の粗さなどから弥生時代の所産と考える。ただし、遺構の一部しか残らず、須恵器小片も出土しており、詳細は不明である。その他、古墳時代以降の遺構から、弥生土器小片、石庖丁、黒曜石・玄武岩片が出土する。ただし、量は少量である。

**弥生時代終末期～古墳時代初頭** 布掘建物 SB224 から西新式の新しい段階と考える土器片とガラス管玉が出土した。2列溝からなる布掘建物は、那珂遺跡群第26次(福岡市埋蔵文化財調査報告書(以下市報)第409集)、第41次(市報第399集)、井尻B遺跡第17次調査(市報第834集)などで確認されている。時期は概ね弥生時代終末期～古墳時代前期であり、本調査事例と整合的である。那珂遺跡群第26次調査のSB06は、2×1間(3～3.3m×2.4m)、溝幅15～20cm、深さ20～45cmを測る。那珂遺跡群第41次調査のSB013・014は、3.5×2.2mで、溝幅約30cm、深さ20～40cmを測る。井尻B遺跡第17次調査の4030は、2×1間(5.4×3m)、溝幅50cm、深さ40～50cmである。本調査例は6.1×4.2m、溝幅50cm、深さ40～50cmを測る。井尻B遺跡例と同規模で、那珂26次・41次例より一回り大きい。類似した布掘建物は、北陸・山陰地域の弥生時代終末～古墳時代前期に散見されるようだが、ここでは詳しい検討ができない。ガラス管玉についても遺構との関連等は今後の課題である。

**古墳時代後期** 方形堅穴建物 SC045 から6世紀後半の須恵器・土師器が出土した。この他の遺存状態の悪い方形土坑が同類の方形堅穴建物の可能性がある。堅穴建物としては、掘り方の検出から堅穴壁際をやや深く掘り下げ、その上に粘土床を貼っていることを確認した。カマドは貼床が固く焼き締まる程度には使用され、支脚・堯を置いた状態で廃絶されている。支脚の頭部が破断し、堯は同一個体とは思われるが接合しない。カマド廃絶に伴う儀礼行為の可能性もある。井戸SE019からは6世紀代の土師器が複数器種出土した。底面に壺と板状木製品が投棄された後、中層に堯・壺・高坏が投棄されている。該期是那珂遺跡群において集落形成が活発化する時期にあたる。

**古墳時代終末期～飛鳥時代** 方形堅穴建物 SC180 から7世紀後半の須恵器・土師器、移動式竈、土師質平瓦片が出土した。SD012・207からも7世紀代の遺物が出土している。ただし、SD207からは9世紀初頭と考える黒色土器A類碗も出土しており、時期は下る可能性もある。SD012とSD207は直線的で直交する位置関係にあり、計画的な配置をうかがえる。この2つの溝とSC180とは軸がわずかにずれている。

**中世** SD144で12世紀前半、SD211、SK141で12世紀後半の陶磁器が出土している。その他柱穴からも12世紀後半を下らない時期の遺物が出土している。

本調査地点是那珂遺跡群の東端で谷部に近く、集落の広がりが途絶えていくという見込みもあったが、予想に反して比較的遺構の残りがよかった。今後も周辺の開発には注意が必要である。

# 圖 版





1. 1区全景 (南から)



2. 2区全景 (南から)

図版 2



3. 1区北壁西側土層



4. 1区北壁東側土層



5. SB224 (南から)



6. SD011 (北西から)



7. SD084 (北西から)



8. SD011 土層 (北東から)



9. SD084 土層 (北西から)



10. SC045 貼床検出 (南から)



11. SC045 (南から)



12. SC045 カマド土層 (北西から)



13. SC045 カマド土層 (西から)



14. SC045 北ベルト東面土層



15. SC045 南ベルト東面土層



16. SP066 (西から)



17. SP079 (西から)



18. SC180 (南から)



19. SC180 東ベルト南面土層



20. SC180 北ベルト東面土層



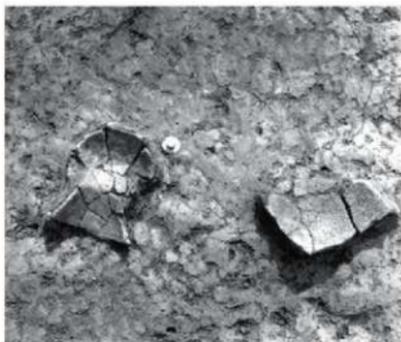
21. SC180 甕 (12 図 36) 出土 (北から)



22. SC180 甕 (13 図 41) 出土 (北から)



23. SK014 (南から)



24. SK014 壺 (15 図 55)、高坏 (56) 出土 (西から)



25. SK009 (南から)



26. SK009 土層 (南から)

図版 8



27. SK201 (南から)



28. SE019 土器 (17図 61 ~ 63) 出土 (北から)



29. SE019 土層 (北から)



30. SE019 (北から)



31. SE019 断ち割り (北から)



32. SK018 土層 (南西から)



33. SK214 (東から)



34. SD012 (南から)



35. SD211 (南から)



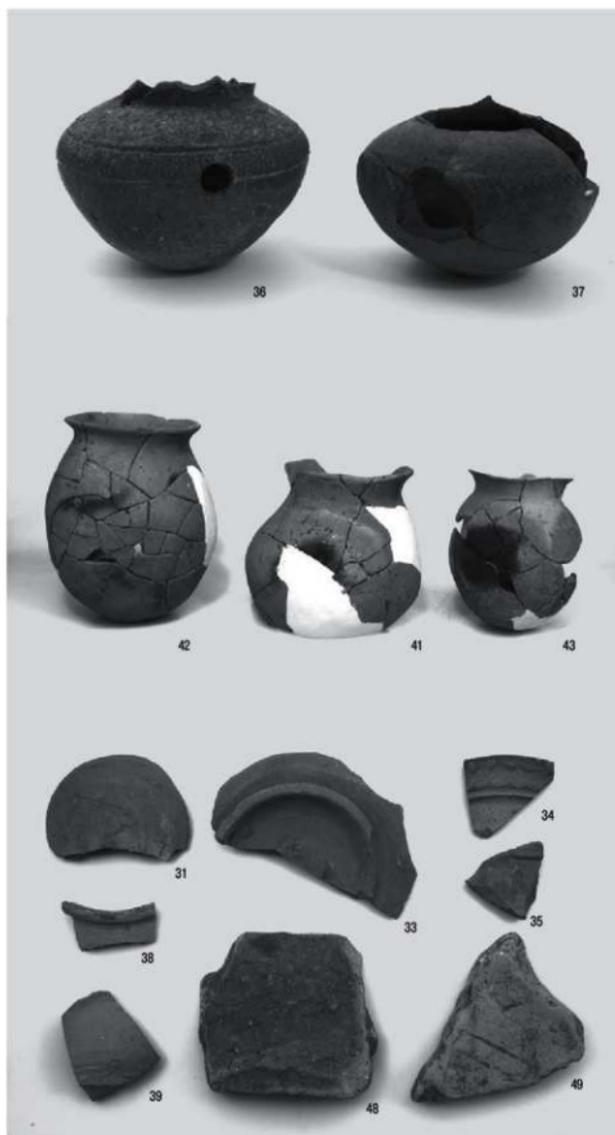
36. SD144 (南西から)



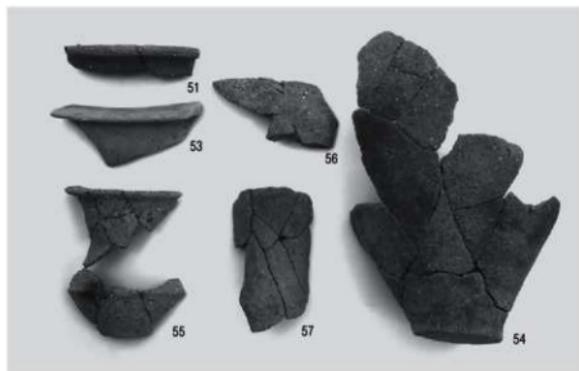
37. SB224 出土遺物



38. SC045 出土遺物



39. SC180 出土遺物



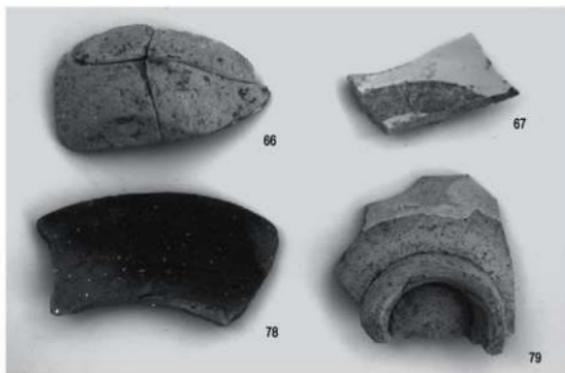
40. SK014 出土遺物



41. SE019 出土遺物



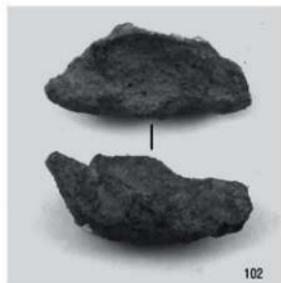
42. SK214 出土遺物



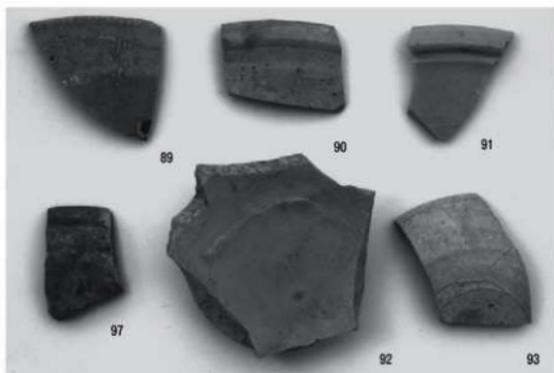
43. SK・SD 出土遺物



44. SD207 出土碗



45. SP166 出土鉄滓



46. SP 出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	なか							
書名	那珂63							
副書名	那珂遺跡群第130次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1158集							
編著者名	板倉有太(編) 石田智子 西澤千絵里							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号 電話：(092) 711-4667							
発行年月日	2012年3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
那珂遺跡群	福岡市 博多区那珂2丁目	40132	020085	33度34分7秒	130度26分19秒	20100630 ～ 20100810	168	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
那珂遺跡 第130次調査	集落	弥生時代中期後半	土坑	弥生土器・石器		弥生土器と粘土の元素分析を行った		
	集落	古墳時代前期	布掘建物	土師器・ガラス管玉		布掘建物からガラス管玉が出土した		
	集落	古墳時代後期	竪穴建物・井戸・柱穴	土師器・須恵器・鉄器		カマド付きの方形竪穴建物を1棟確認した		
	集落	飛鳥時代	竪穴建物・溝・柱穴	土師器・須恵器・瓦・木器・砥石		壺溝を持つ方形竪穴建物を1棟確認した		
	集落	奈良～中世	溝・柱穴	土師器・須恵器・陶磁器				
	集落	近世	耕地造成	土師器・染付				
要約	<p>本調査では、弥生時代中期後半、古墳時代前期・後期、飛鳥時代、奈良時代～中世前期、近世の遺構を確認した。このことから、本地点が、弥生時代から中世前期まで断続的に集落として利用され、近世以降に耕地利用されていたことが明らかになった。本調査地点は那珂遺跡群の東端で谷部に近く、集落の広がりが見えなくなるという見込みもあったが、予想に反して比較的遺構の残りがよかった。今後も周辺の開発には注意が必要である。</p>							

### 那 珂 6 3

— 那珂遺跡群第130次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1158集

平成 24 年 3 月 16 日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号  
電話 (092) 711-4667

印 刷 田堀印刷株式会社  
福岡市中央区草香江1丁目8番24号  
電話 (092) 751-1785







